

マーレとインクリメン ト

めいどすきあき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロードのSSです。

読書好きのマールレとインクリメントが出会い友だちになるお話です。

一部若者そっちのけの表現がありますがお許し下さい

追記：前後編の予定が書き終わらず中編が入りましたごめんなさい

目次

マールとインクリメント	前編	〜	出
会いととまどい	〜	〜	1
マールとインクリメント	中編	〜	宝
物	〜	〜	17
マールとインクリメント	後編	〜	幸
せ	〜	〜	26
マールとインクリメント	エピローグ	〜	41

マールとインクリメント 前編 〽 出会いととまどい

ナザリック大図書館への転送ゲートに続く通路を歩く一人のメイド、急いでいる感じはないものの足取りは早い。それでも周りには十分意識を向けており、後ろからの足音が近づくのに合わせて振り向き相手を確認後通路の端により両手を前に揃えておじぎをする

「マール様こんにちは」

「あつインクリメントさん、こ…こんにちは」

「マール様も図書館です?」

「あつはい、ほ…本を読み終えたので、次を借りようと思つて」

「私もです。マール様はどんな本を読まれてるのかしら?」

「が、ガリバー旅行記です」

「どんなお話?」

「えと…ガリバーさんが小人の国や巨人の国、空飛ぶ都市、馬の国を訪れる話です。あの…最後は少し切なかつたかな?ピニスさんとか新しい仲間をちゃんと信じようって

思いました」

「つぎ…貸してもらおうかしら？」

「あ…あの男の子向きだと思えます」

「…なんとなくわかったから詳しくは聞きませんが…」

いつも冷静に一步引いているインクリメントが顔を少し赤らめる

「あ…あのその…インクリメントさんは何を借りたんですか？」

「赤毛のアン…司書さんのお勧めを読んだわ」

少しづつ自分の中に散らばる物を手繰り、集めて言葉にしていく

「色々思った…そうね…木々に囲まれて…それで…うん本を読みたい」

「そ…それなら今度6階層に来ませんか？」

マーレにとつてはなんでもない誘い

でもそれは一般メイドには厳しい誘いだった。

「マーレ様…ご厚意はありがたいですが私では7階層は通れません」

その言葉の中に諦めに近いものを感じマーレは混乱する

何故混乱するのかわからないけど…話を変えようと必死で混乱した頭で考える

「あ…あの…ぼつ僕達仲間ですし様はいらないです…」

「えっ…ですが…マール様は守護者で素晴らしい力をお持ちですし」

「そ…それならインクリメントさんは、ここを綺麗にしてくれてます、それはぼ…僕には出来ないことですよ！」

「ありがとう…マール…君…なんだかすごくこそばゆい…」

普段の仲間の会話から一步踏み込んだだけに、抑えようとしても抑えきれない…
気まぜくもむずがゆい1秒が1分にも感じる時間の中、相手だけを意識してどちらともなく頬が染まり顔が緩んでいく。

マールはどんな耐性魔法でも止められない精神の動揺をなんとか抑え

「くっ君付け…で呼ばれるの、はっ初めてなんです。う、上手く言えないけどうれしいです…えへへ」

インクリメントもそのあまりにも素直な一言に答えにならない答えを返す

「っ…照れるわ…」

しばらく相手を見て目が合うとそらし、何かを言おうとして止まり

次の行動への取っ掛かりが掴めないまま時が過ぎ…

全身黒尽くめの男に抱えられたペンギンが通りかかる

「止まれ」

「いー」

「マーレ様、インクリメントさんこんな所でどうかされましたかな?…まるで…そう図書館にあるキックオフという漫画のようでしたよ…」

声をかけるが反応の薄い二人

「どうやらこれ以上お話するのも野暮のようですし邪魔な私はこれで…よしいけ」

「いー」

「じゃ邪魔って…」

「と…図書館にいかうか」

「そ…そうですねマーレ…君」

この後二人は図書館でキックオフを見つけページを開き再びもしもじ時間を過ごすことで、互いに心のなかの相手の位置をずらし、だからこそ意識をしまっていた。

そして廊下でもじもじしていた姿は一部のメイドの間で噂になった

内股で何かに怯えるようなしぐさで歩き、脇から出てきた他の者にびつくりしながらも、頭がぶれることも歩幅が狂う事もない…例えるなら演技中の俳優のように振る舞う少女、正確には女装をした少年が歩いていった。女装とはいえ金髪のボブカットに少しれた長い耳、オッドアイのどこか緩い表情は年齢的な中性さを超え知ら無い物には男装であつても少女に見えるかもしれない。

その少年は豪華な扉の前で一度大きな深呼吸をし、意を決した表情でドアをノックし許可をもらい中に入る

「しつ失礼します…アインズ様」

「マールか？どうした何か問題でもあったか？」

「あつあの…実はお願いがあるんです…」

「(マールがお願いというのも珍しいな) ふむ、聞かせてもらおう」

マールは指にはめた指輪を意識せずに触りながら

「メ…メイドさんを6階層に、まっ招く際に、あのその…指輪を使ってもよ…よろしいでしょうか？」

「(メイドを招く?…なるほど確かにLV1じゃ7階層は危険だよな…でも何故だ?わざわざ許可を取りに来るといふ事は仕事ではないってことか?) それはマールの個人的な理由なのかな?」

マールはアインズの“個人的な理由”を聞き体を固くする

「…は…はい、やっぱり…だ…だめですよね…」

「構わないぞ?」

「あつ…え?あつありがとう…」

「私は反対致します」

マーレがお礼を言い終わる前にアインズの横に立つアルベドが口をはさむ。その口調は冷静で感情的なものは感じられなかった。それだけにその場にいるもの、アインズ、マーレ、アインズ様当番のメイドを硬直させる。

「（この様子からすると訳がありそうだな）：理由を聞かせてもらおう」

「はい、アインズ様」

アルベドはマーレに向かう

「マーレ、メイドさんという事なら多分一人、良くて数人よね？」

「は…はい」

「個人的に仲の良い子がいるのはいいことよ…でも6階層にまで招くのであればその子に対する妬みを生むかもしれない…それは理解できるわね？」

マーレは自分が指輪をもらった際に祝福してくれながらも複雑な顔をした姉、それ以上には貰った時のアルベドを思い浮かべ理解する

「…そ…そうですね…やめておきます」

マーレはインクリメントが木々に囲まれて本を読むことにあるのを知り、一緒にそれをしたと考えたと居ても立つても居られなくなり、勢いに任せてここに来た自分を振り返り浅慮を恥じ入る。しかしそれでも叶えてあげたかったという後悔も湧き上がる。

「まちなさい、そういうことを言いたいのではないわ」

優しいまなざしでマールを見つめ、アインズに振り返る

「アインズ様せっかくですから全一般メイドを6階層に招いてはいかがでしょうか？
「いあんりよこう」：でしたか？を行うのはいかがでしょうか？」

アルベドの提案はマールの願いを内包したものだ

「（一般メイドはずっとこの階で過ごしているし、いい息抜きになるだろう）慰安旅行か
：どちらかと言えばピクニックに近いが、十分楽しめるだろうだろう。マール」

「はっはい！」

「お前に幹事を任せる、日程は1日：だな、スケジュールを作り調整せよ。移動は転移のアイテムを貸すので食堂と会場を繋げば良いだろう。マールが必要と思う部署とこの件を直接打ち合わせる許可を与える。食事などで支出が増えると思うが遠慮はいらないぞ。どうせなら豪勢に行こうじゃないか」

「あつありがとうございます、アインズ様、アルベド様」

普段おどおどしているマールだが、今この時は心の中からあふれる喜びの笑顔であふれ拳動全てが明るく活き活きとしていた。

「（こんな嬉しそうな顔をされるとこつちが嬉しくなるな：マールだしきちんとやってくれるだろう：これは絶対成功させてやらないとな）いや礼を言うのは私だ。私の仲間

たちが作ったナザリックを美しく保ってくれているメイドの皆には感謝をしているが、私なりの感謝を示す方法が見つからなかったのだ（みんな、俺に仕えることで十分と言うんだよな）。それを教えてくれたこと感謝する、マーレ、アルベド」

そのアインズの言葉を聞き、あふれる涙を抑えきれなかったアインズ様当番により事の顛末はナザリック中に伝わり、メイドたちの会話を独占した。曰く「アインズ様のご配慮もつたないけど感謝感激」「お優しきアルベド様」「マーレ様頑張れ」特にマーレの行動に心当たりのあるメイドたちはニコニコとインクリメントを刺激しないように話のネタにしつつ慰安旅行の日まで盛り上がっていた。

マーレは休みの日こそ布団の一部だが仕事となれば手を抜く事はない。今は普段の仕事に加え慰安旅行の準備が重なり大好きな布団でごろごろする暇が少なくなかった。

というのも布団で横になるとアイデアが浮かび想像を膨らませるとワクワクが止まらくなり布団から抜け出すのを繰り返していたからだ。

マーレはそれが楽しくてたまらなかった。

そして今そんなアイデアを実行すべく大図書館で司書長のテイトウスと話していた

「…なので、みんなに本を読むきっかけを作りたいんです！」

「協力しよう」

「わ…わ…ティトウスさんありがとうございます」

マールは何度も何度も頭を下げる

「構わない、私としては大歓迎だ。騒がしいのは願い下げだが活気が無いのは淋しいものだからな」

「ぼ、僕もそう思います、せつかくこれだけ色々あるんだからみんなに楽しんで欲しいです」

本来表情が無いはずのスケルトンメイジの顔に孫を見るような雰囲気が宿る

「そうだ一般メイド・インクリメントから君宛の手紙を預かっている」

「わっあっありがとうございます」

「司書J、渡してあげなさい」

わきに控えていた司書Jの腕章をつけたエルダーリッチがマールに近づく

「どうぞマール様」

「ありがとうございます！」

喜ぶマールをみてティトウスが体を動かす

「…どうかしました？」

「いやな、少し体が痒かったただけだ気にしないでくれ」

スケルトンである司書長がかゆいというのに不思議なものを感じつつも、優しい手つ

きで手紙をアイテムボックスではなく懐に収める。

それはまるで手紙を自分の心臓に近づけようとする行為にも見えた

「そ…それでは失礼します！」

頭を深々と下げ、足早に図書館から退出するマーレの足取りは軽やかで、何かのリズムを取るように頭が揺れ髪がなびく。

「恋ですね、司書長」

「違うな。守護者マーレは初めて友だちができたのだ。それが異性だっただけだろう」

「友達…ですか？それならシャルティア様は？」

「兄弟みたいなものだ…取り敢えずは初心者を読みやすい本を集めておいてくれ」

「分かりました」

司書が出て行くのを眺めながら

「研究以外でこんな気分になるとは思わなかったぞ。だが悪くない」

タイトウスはつぶやきながらスクロールの研究に戻った

「インクリメント…顔が緩んでるわよ」

食堂で本に目を向けても集中できずページをすすめることの出来ないインクリメントにシクススが声をかける

「・・・からかわないで欲しいんだけど?」

からかわれる自覚は有るんだと思いつつもそれを言葉には出さない

「マール様頑張ってるよね」

「・・・そうね」

木々の中でのんびり本を読みたいという夢を叶えてくれている、そのため忙しく動き回ってくれているのはすごく嬉しいと思う反面、最近会えていない：元々そんなに顔を合わせていたわけではないが：それを淋しいと感じる。

たった一度の触れ合いでこんなにも心が動いた事に疑問を感じ自分に何度問いかけても『楽しかったから』という答えしか帰ってこない。『好きか』と問いかければ好きだと即答できるが、『恋人になりたいか』と問えば答えはわからなかった。

そんな自分で理解しきれない気持ちを抱えつつも、マールに対してお礼を伝えたい：その気持が手紙を書かせたが、何度も何度も書きなおし文字にできたのは『ありがとう、楽しみにしています』だけだった。そんな歯がゆい気持ちでも顔がにやけるだろうか？わからなかった

「・・・緩んでた?」

「そこまでじゃないけどね、普段の凜とした感じじゃなくてゆるい感じだったかな?」

何も答えず息だけを吐くインクリメント

「でね、みんなで話し合っただけけど…」

インクリメントはシクススが笑いをこらえている顔を見て警戒する

「…何？」

「当日のマーレ様のお手伝いは任せるからね、その代わり食事の準備とか後片付けは全部私達ができるから」

その提案は魅力的だった。魅力的すぎてつい意固地になってしまう

「お断りするわ…準備や片付けはみんなでするものだと思う」

意地を張るインクリメントを可愛いとシクススは思い暴走する

「ふっ…んだ…べ…別にあなたのためにするわけじゃないんだからね！」

シクススの顔は嫌味など全く感じさせない本当に楽しそうな笑顔だった。わけがわからず『何を言ってるのこの子は？』という気持ちが溢れる

「私達みんなマーレ様に感謝してるのよ？それとあなたにもね、だから…あなたは私達からマーレ様へのプレゼントなのよ。だから遠慮無く本読んでいいからね？」

でね、この話はペストーニヤ様にも許可貰ってるから安心して」

「ちよ…どういふことー！」

「そういうこと」

シクススが周りを見渡すのに合わせて周りを見ると皆がこちらを見て微笑んでいる。

手をふっている子もいる。同じ創造主を持つ姉妹なんか気合い入りすぎだと思っぐら
いだ

「…わかったわ…みんな…マールく…様当番引き受ける」

緩みきつた空気はメイドたちの口を軽くする「君でしょ！く・ん」「そうだそうだ」

あまりもの姦しさに料理長や副料理長は苦々しい顔をしながらも今の勢いには勝て
ないと悟り口をつぐむ

「…うるさくなつたからそろそろ帰る。あなたも当日は失敗しないように気持ちを引き
締めるといいと思う」

普段と変わらない言動と行動、だけどその顔に浮かぶ恥じらいを見落とすものはいな
い。

「そうね、気をつけるわ」

そしてそれをその後話題にしないものもいなかった。

「お…お姉ちゃん」

「なあにマール」

「み…みんなが来た時の椅子とかどうしよう？あの…作つたほうがいいかな？」

「私はいらなと思うな、森林体験みたいな感じでしょ？シートやハンモック用意した

り…うんトレントに来てもらって椅子になってもらおうよ！」

「そうだね！うん、それは楽しそうだね」

アウラは目元を緩めてマーレを見つめる

「…？ど…どうしたの？」

「椅子ならさシャルティアに来てもらおうか！」

「お…お姉ちゃんそれはやめようよ…」

苦笑するマーレの顔を見てアウラの目がいたずらつ子のそれに変わる

「そうだね、シャルティアが興奮してインクリメントを襲ったら困るもんね」

「お…お姉ちゃん!!!」

いつものおどおどとは違う挙動不審がアウラには新鮮で面白い

「取り敢えず、食事を置いたりするテーブルは私が用意するから、トレントたちにはマー

レから話をしておいて。後なにか考えてる？」

「う…うん、席取り合戦を景品付きで考えてるよ」

「景品って？」

「えと…アインズ様にお姫様抱っこされる券」

アウラの脳裏に変貌したアルベドが暴れる姿が思い浮かび『やめろ！それはまじでやばい』と経験則が警告を鳴らし額に汗が浮かぶ

「それ…アルベド知ってるの？」

「う…うんアルベドさんが発案だから」

「ああメイド達を出汁にして抱っこされるつもりね…大人げないなあ」

「お…お姉ちゃん…信じてもらえないかもしれないけど…アルベドさんは参加しないよ」

「う…嘘だ!!」

オークシヨンの時のアルベドやアインズ様押し倒し事件を知っているだけに、そのアルベドは別人か？とまで考えてしまう。そんな姉に苦笑しつつマールレは会話を続ける

「…あ…あと宝探しを考えてるんだ、ヒントを書いた地図を渡してそれを元に探してもらうんだ。でね…あの…そっそれをお姉ちゃんにお願いできないかな？」

「うんわかった、41人分でいいの？」

「うっううん…ペストーニヤさんやエクレアさんもくる予定だから余裕見て50ぐらいお願いしてもいいかな？」

「いいよ、マールレはどうするの？」

「ぼ…僕は図書館にみんなを連れて行く役かな？」

「そっか…私も本読んでみようかな？」

「えっ…お…お姉ちゃんが??」

「マーレ…そこまで驚かれると流石に凹むわ」

「ズ…ごめんなさい」

百面相のようにくると変わると変わるマーレの表情に毒気を抜かれる

「でもそのとおりだけどね、面白い本読んだら話し聞かせてよ」

「うん、わかった！…そっそれじゃあいくね」

指輪を使い転送するマーレを見送りつつ

「楽しそうだな、よし私もせっかくだから楽しむか！」

そして慰安旅行の日がやって来た。

マールとインクリメント 中編 宝物

ナザリック食堂

食事時間とずれているため静かなこの場所を改めて見ると『こんなに広かった?』と感じる。食事中も本を読んでいた自分はこの部屋をきちんと見ていなかったのかもしれない…それともとりとめのない高揚感がそう思わせているのだろうか?

自分に問いかけてみるが答えは何も見つからなかった。

インクリメントは目の前に有る転送ゲートを見つめて立ち止まり

「朝はとつても素敵、その日に何があるかわからないから想像の余地があるわ…」

アンのセリフを呟く。

「違う…これだと嫌なことがあるかもしれないって感じる…」

インクリメントは自分に不安があることを自覚し、もつと前向きな言葉がないか少しの間おもいだす。

「こんな朝にはただただ世界が好きでたまらないって気がしない?」

心のなかで今回の機会を作ってくれたアインズ、アルベド、メイドのみんな…そして

マールへの感謝が浮かぶ。

「…今日は絶対いい日になるー!」

インクリメントは顔を上げ転送ゲートに入っっていった

慰安旅行幹事の朝は早い。

マーレはアウラの用意した机を日当たりを考えながら並べていく。その机に合わせてトレントに移動してもらい、心地よい場所かどうか自分で座り確認していく、日差しの方向を考え1日中丁度いい感じになるだろうと確信する。

「つ…次は気温かな?」

マーレがシャドウ・オブ・ユグドラシルを構え魔法を発動すると心地よい気温に変わっていく、続けて湿度も調整される。

「あつそつそうだ…今のうちに練習しておこうかな?」

マーレは赤く染まり始めた空に背を向け効果範囲と威力を丁寧に設定し、まだほの暗い空に雨を降らせる。その雨は弱々しい日の出前の明かりを受けて空間を朱に染まっっていく

結果を確認する前に転送ゲートが動作したのを感知する

「あつあれ…まだ早いよね?」

マーレはゲートに目を向けた。

インクリメントがゲートをくぐると匂いも空気も何もかもが変化した

周りを見渡すと、昇りゆく太陽に染められた木々が刻々と朱に染まっていき変化を止めることはない。想像していた以上の風景に圧倒されながらも今感じている全てを記憶に焼き付けようと目を見開き、やがてその瞳はマーレが降らせた雨で止まる。

「…あれが虹？」

弱々しい朝の光で作られたぼやけた赤い虹は太陽が登るに従い輪郭をはつきりとさせつつ色と鮮やかさを増していく。インクリメントはただ立ちすくみ虹が消えるまでそれを見つめていた。

インクリメントは我に戻ると横に誰か居るのに気づき顔を向ける

「マーレ君…」

「あ…あの…僕何かしましたか？」

マーレに心配されて自分が涙を流していたことに気づく

「そうね…したわ…」

マーレの顔が曇る

インクリメントは精一杯の気持ちを表情にのせ、マーレに体を向けると着ているワンピースの裾が広がる

「マーレ君…こんな素敵な朝をくれてありがとう…私は今日の全てが好きになれるって思う」

マーレはインクリメントと目を合わせて微笑む

「よ…良かったです。服も…その…似合ってます」

「あ…ありがとう…」

昨夜アインズから貸し出された服の中からインクリメントはえんじ色のワンピースと麦わら帽子を選んでいた。今日この場所がグリーンゲイブルズになる予感があったからかもしれないがインクリメントは赤毛のアンをなぞっていた所があった。

「だけどそうじゃない」

「マーレ君…今日一緒に楽しもう」

「でも僕幹事だから」

「なんでも一緒にすれば楽しいと思う」

「そ…そうだね！」

少し離れた所ででるに出来なくなったアウラが二人を観察しながら

「あ…もう、見てるこつちが照れるわ…声かけづらいからそろそろ仕事に戻ってよ

マーレ」

「インクリメントありがとうとくおかげで準備が早く終わったよ」

「いえ…アウラ様、私はテーブルクロスとかのセッティングしただけです」

「それがめんどくさいんだよね、マールと二人であーでもないこーでもないってやってたらまだ終わってないよ」

「そ…そうですね、適材適所ですよ」

「ところでさくインクリメントって今日一日マールの手伝いなんだよね？」

「はい」

「それじゃ宝探しできないだろうから今行っておいでよ」

アウラはニコニコと一枚の地図をさし出す

「お言葉に甘えます。」

インクリメントは差し出された地図を受け取りマールの方を見る

「？」

マールはインクリメントの意図がわからずただニコニコとしている

『あんたねく今日一緒に楽しむって約束したんでしようが！察しなさいよ！』

マールにげんこつを入れたいのを我慢してインクリメントに聞こえないように伝える

「あ…ああ…うん一緒に探そう」

「はい」

歩き始めた二人が離れてからアウラは頭を掻きながら溜息をつく

「はあ…今日一日この調子だったらどうしよう…マーレもかなり耳年増だと思っただけどなあ」

二人の部屋は創造主のぶくぶく茶釜と、餡ころもっちもち、やまいこのナザリック女性陣が御茶会を開いていたこともあり、二人は意味の分からない会話も含めていろいろ聞いていた。当然その中には猥談もあつた。とは言え耳年増だからといって聴くなるわけではないとアウラは思っていた。

「いつか、取り敢えず見守ろう」

アウラは能力を使い二人を言葉通りに見守りという名の覗きを始めた。

「マーレ君ここじゃない？」

開けた…と言う程ではないが十分な広さの広場を小川が横切り木漏れ日がキラキラと川面を照らす。周りを見回すと地形は地図の絵と一致していた。

「う…うん、ここだと思う」

「よし…んんんん」と

組んだ指を頭上に持ち上げ伸びをする

「疲れはないけれど、こういう所を歩き慣れないせいか少し足が痛い」

「そ…それなら、川に足を入れると…気持ちいいらしいですよ！」

この話はナザリックが転移する何年も昔に部屋で聞いた会話の知識でしかない、それでもそれを思い出せたのはマールにとつては僥倖だった。そして周りを見渡せば川辺に座りやすく作られた二人掛けの椅子がおいてある。

「らしい？マール君もしたことない？」

「あつう…うん…ないかな」

「そっか、じゃあ行こう！」

インクリメントはマールの手を引っ張り走り始めるとマールはそれに合わせて動く。ほんの数メートルの距離でしかないが、楽しそうに走るインクリメントの顔を見るだけでマールは楽しくなり笑いがこみ上げる

「あはははは」

笑い声を聞いたインクリメントは立ち止まり振り返ってマールを見つめる

「マール君…私、もう宝物見つけたよ！」

「すつすつ僕もまだ見つけてないのに」

「ふふ、アウラ様が隠したものは違う。私だけの宝物」

「な…なんですか？」

「マーレ君の笑い声」

「そ…それ宝物…なの?」

「うん。マーレ君優しくてずっと私のこと気遣ってくれてたから楽しめきれないかもって思ってた。だけど今マーレ君も楽しんでくれてるって分かったから」

「ぼ…僕インクリメントさんが楽しそうなのを見たら笑ってたんです…だ…だから一緒にです」

「ふふふ」「あはははは」二人の笑い声がハモる

二人は笑いながら靴を脱いで足を川に入れて椅子に座る

「気持ちいい…それに色んな音がしてる」

小川のせせらぎ、木々の葉擦れの音…耳に聞こえるすべての音がインクリメントには楽しい

そんなインクリメントを楽しそうに見ているマーレ

「…ねえマーレ君!あそこ!あそこ!あそこ!でなにか光ってる!」

スカートの裾を持ち上げ小川の中をパシャパシャと走り対岸の石の間から小さな箱を取り出す。

小さな箱には男性のレリーフの入った金貨が一枚入っていた。

「マーレ君…これ貰ってもいいのかな?」

「う……うん。アインズ様のご許可は頂いてるから……えと……えつとこれ旧金貨かな？アインズ様はこちらを大切にしているらしいよ、えと思いい出の品なんだって」

「アインズ様の思いい出の金貨……そんな大切なもの勿体無くしてもらえない」

「だ……大丈夫、それがアインズ様の気持ちなんだよ！」

インクリメントは少し考え頷く

「わかった……大切にする」

「うっうん！」

二人はしばらくその場に留まりいろいろな話をし、覗いているアウラを十二分に疲れさせ帰路についた。

マーレとインクリメント 後編 〽幸せ〽

6階層は基本樹海ではあるが表情は豊かだった。闘技場だけでなく巨大樹に廃墟と
いった多くのオブジェクトが配置され、また至高の1柱ブループラネット渾身の空だけ
でも見応えのある景色だった。ただし一部地区はおすすめできるものではなく間違っ
てもそちらに入り込まぬようにアウラのシモベが周りを固めていた。

そんな6階層にある湖畔の草原を会場としテーブルなどは日差しを避けるために少
し離れた木陰に設置されていた。

普段のメイド服とは違う服：セーラ服やナース服、ブルマに着物にウエディングドレ
スにしか見えないもの：みんな色々な服を着て楽しそうに並んでいる前でアウラが話
をしていた。

「そんなわけで、ただ見て回つてもつまらないだろうから宝探しにしました！お宝はア
インズ様が目意してくださいました金貨です！」

アウラの説明にメイドたちの間から喜びの声上がる

「し・か・も、ナザリックの宝物殿ではなくアインズ様が個人的に所有し大切にされてい
た旧金貨です！」

アインズが金貨を用意した理由は簡単だった。人数十予備で50個の提供を頼まれた際に「隠せるサイズで数のあるもの」というリクエストを考慮に入れた際、真つ先に金貨に思い至っただけであり、多少の後ろめたさから思い入れのある旧金貨を提供したという単純なものだったが、アインズ所有の思い入れのある金貨というフレーズはそれだけで天井知らずに価値を押し上げた。

「地図はみんなバラバラにしようかとも思っただけど、せつかくだから同じ物を4枚づつ用意しました。で地図は箱のなかに入れてあるのを引いてもらうからね」

チーム分けは謹慎中のペストーニャ：アインズはペストーニャも参加すると思っていたが、謹慎を続けると回答した：から提案された「姉妹でグループになり易いのであえてバラけさせたい」という意見を取り入れたものだ。

「後、ぶつちやけ歩いて目的地に行ったら1日で帰ってこれないから移動は私のシモベに乗ってもらいます。きちんと椅子つけてるから安心してね、そんなわけで時間はお昼ぐらいには帰ってこれると思います」

アウラの説明が途切れるとメイドの中から手が上がった。

「は～～い！アウラ様！質問です」

「なに～～？」

「ペンギンも一緒ですか？」

「メイドたちはほぼ全員がその質問に相槌を打つ中アウラは想定通りといった顔で応える

「残念ながら別！流石にエクレアに密林はきついだろうから水温を適温に調整した湖で遊んで貰う予定です。エクレア？宝物は湖底だからがんばって探してね」

「おお、アウラ様お気遣いありがとうございます。大変楽しみですな」

「アウラ様！ありがとうございます！！」

皆の利害が一致した。

「湖はエクレア好みに設定しちゃったから、泳ぐのは出来ないけど又の機会ということ、他に質問がなければみんなくじ引いて〜」

マーレとインクリメントが地図を入れた箱を持ちみんなの所を回っていくと、マーレには感謝の言葉が送られ、インクリメントには要約すると「うまくやってるわね、後で報告しなさいよ幸せもの」というやじうま魂が降り注いだ。

アウラのシモベが各班に付いていることもあり、皆を送り出してしまおうとすることがなくなったマーレはインクリメントのところに走り寄る

「あつあの…インクリメントさん！いつ一緒に本読みませんか？」

「うん！読む！読みたい」

インクリメントは準備の時から目星をつけていた吊るし椅子のベンチを指差す

「あそこで読みたい……いい？」

「はい！あつぼ……僕飲み物取ってくるので……あの……何がいいですか？」

「ん……紅茶がいい。冷めても美味しいものが嬉しい」

「あつわ……わかります。本読んできると飲み忘れるんですよね」

「そうね……何度も苦くなった紅茶を飲んだわ」

「い……いつてくるね！」

「お願い。マール君」

インクリメントは手を振ってマールを見送り、本を持って吊るし椅子に座る。

風に揺れる木の葉でふるいにかけられた日の光がキラキラと降り注ぐ、体を動かすと揺れる椅子が心地よい。

「私とても幸せ」

それはアインズに仕えることの幸せとは別に新しい幸せを見つけられた喜びの言葉だった。それでも……もしアインズにマールと会うなど言われればそれに従うだろうということも理解していた。それでも幸せと感ずるのが不思議で、インクリメントは本を開かずに木漏れ日を浴びながら考えていると以前食堂で誰かが言っていた言葉を思い出す

『なんで一緒にいるのかって？ 難しいこと聞くなー…んーアインズ様にお仕えるのが当たり前みたいに一緒にいるのが当たり前だからかなー？ 姉妹とは違う…んー友達だからって感じ？』

「ああ…フオアイルだ…友達か…そういえばもしアインズ様がお休みをくださらなかったら？」

アインズが仕事をしない日を作れと命じた時、インクリメントを含め全メイドが反対した。自分にとつて最も幸せな行為を禁止されれば誰でも怒るだろう。それでも魂を揺さぶられるほどのアインズ様当番という対価によつて受け入れたものの、仕事一筋だったメイドにとつて休みの日は持て余すものだった。それでも休みがなければ今に至る出会いはなかったかもしれない。もしそうであるならばインクリメントにとつてマーレとの出会いはアインズに与えられた祝福に思われた。

「アインズ様感謝いたします…」

落ちて着いた心はインクリメントを眠りに誘った。

「マーレ様ーインクリメントーもう夜だよー終わりだよー帰るよー」

つり椅子を揺らされ棒読みで何度も呼びかけられインクリメントは目を覚ます

「え…夜？」

ゆっくりと目を開けて周りを確認するが初めての空のもとで時間がピンと来ないものの、声をかけたのがフォアイルとわかり嘘だと気づく。

「夜か、残念…フォアイルはもう帰るんだ」

寝ぼけながらも見え透いた嘘に突っ込む

「わわわー嘘だよー嘘ーそれよりお昼ごはんの準備はできてるから、マーレ様起こしてねー任せたよーあとこれ濡れタオル」

濡れタオルを渡され、周りを見渡すがまだ頭がはつきりとしなが膝に何か乗っているのを感じ下を見る

「マーレ君?!?!」

一気に頭が冴える。マーレはインクリメントの膝に頭を乗せ気持ちよさそうに寝ていた。柔らかそうなほっぺたを指でつつきたいという衝動に駆られながらもそれを…仲間たちのひやかし対策のために…抑える。それでも幸せな気分が顔が緩むのは抑えきれず、このままでいたい欲求を押し殺し勤めを果たそうとすると

「インクリメント…よだれよだれ!」

仲間の声でフォアイルに渡されたタオルの意味を察し慌てて顔を拭く。少なくともマーレに見られなかったと自分を慰めてから、マーレの肩をゆるする

「マーレ君、起きて、マーレ君」

「ん…もう少し…」

ぐずるマーレの意外な一面を見て可愛いなと思いつつもメイド魂がそれを許さない
「起きなさい！マーレ君！幹事でしょ！」

マーレは飛び起きる

「は…はい!!おはようございます」

「おはよう、マーレ君」

「ご、ごめんなさい！寝ちゃいました」

「私もごめんなさい。心地よくて寝てしまったみたい」

お互いに謝り始める二人をアウラが制する

「もういいからご飯食べよう、みんなお腹へってるよー」

午後から、アウラといく6階層探索ツアー、マーレの図書館体験、マーレの龍によるドラゴンライド、そしてインクリメント担当の休憩所が予定されていたが、午前中にアウラのシモベで密林を駆け抜ける恐怖に心が折れたものが多かったことでアウラのツアーはより刺激を求める精鋭のみの先鋭化したものとなり、かわりに図書館ツアーの後に予定されていたドラゴンライドが前倒しされ、インクリメントが担当を任された。

とは言え別にドラゴンに騎乗して何かするのではなく、受付時にコースの希望をまと

めてそれを竜に伝えるだけの仕事だった。というのもも全員のリクエストを竜が直接聞いていては収集がつかなくなるからで、インクリメントの指示のみを聞く様にマールが命じたからだ。

インクリメントは仲間たちがあまりひやかしに来ないことに安堵と恐怖を覚えていたが、周りからすれば恥ずかしがるのをからかうことは面白いが、気持ちが悪くもなるとは思わなかった。またどうせ話を聞くなら明日からの娯楽にしようという思いもあり、インクリメントは忙しいながらも平穩な午後を過ごしていた。

そして日が傾き始めた頃予定通り全員が戻ってきた。

今から始まるのはアインズ様にお姫様抱っこされる券争奪椅子取りゲーム。

マールはアインズ様に抱っこされるために参加したいと本気で望んでいたが、自分が出場すれば勝つのが確定しているし、それを理由にアルベドが参加しかねないと思っていた。そしてアルベドが参加してしまえばこちらの攻撃をカウンターされそのすきに座られてしまい勝てないと判断している。もしかしたらマールが参加するのをはじめから期待されているのかもしれないと深読みしてしまう。それでも同じことを何度も考えてしまうほどアインズ様に抱っこされるのは魅力的だった。

ただ、それ以上にアインズに任せられた仕事を成功させたいという思いが強く、そし

てそれは自分が願った結果であることも衝動を抑える要因だったが、それはマーレに複雑な感情を抱かせた。

自分の中でアインズの命令と並べたくなる感情があるということが自分で許せない。アインズの命があればインクリメントの命を奪うことも出来る。しかしそれは想像しにくかった。そんなアインズに反する気持ちがあることにマーレには耐えられず、マーレはインクリメントの顔を見れなくなっていた。

マーレが深い思考の檻に入り込んでいる間に椅子取り合戦は終わり勝者が決まった。勝者はインクリメントだった。

「あゝこまったなあアインズ様まだ戻ってこれなさそうなんだよね…マーレどうしよう？」

「しかたないから、マーレ様が抱っこしてあげてください！」

「やっちやっつけてくださいマーレ様」

「わーうらやましいなー私もだっこされたーい（棒）」

「マーレ様頑張りー」

「う…うるさいわよ…何を言っているのあなた達は！」

「きやーインクリメントが怒ったーマーレ様くたすけて！」

マーレの思考が正常ならゲームの最中に出来レースだったことに気づいていた

う、仮に気づかなくても今気づいたはずだった、しかしマールレの気持ちは病んでいた
「ぼ……僕がアインズ様の代わりなんて……ふっ不敬です！……出来るわけないじゃないですか！」

あまりにも予想外のマールレの哀しい剣幕に皆が引き微妙な空気が流れ始めた時転移
ゲートが開く

「すまない、思ったより用事が長引いて遅くなってしまった」

ゲートをくぐったアインズは周囲を見渡し察した

「なっ……」



数日前

「アインズ様先程はお話を合わせていただきありがとうございます」

「…理由を聞かせてもらおうか」

「はい。アインズ様これは出来レースです。目的はマールレにインクリメントを抱っこさせることです」

「(抱っこして……なんかアルベドのノリが変なんだけど……)そこまで炊きつけて大丈夫なのか？」

「インクリメントはわかりませんが、マールレは大丈夫でしょうね。」

「(わからないって・・・おい!)・・・どういうことだ?」

「あの年頃の子が41人もいてこんなおいしい話煽らないわけないじゃないですか?」

「…ア…アルベド?」

「実はこの話はメイドたちからの依頼なんです」

「…ん?」

「アインズ様への感謝は日々の仕事で返せますが、マーレには機会がないのでこういう形にしたいそうです」

「(それでアルベドが参加しないと切り切ったわけか)そういう事なら当日は私は忙しい方がいいな(いたら俺に気を使うだろうし)」

「ご配慮感謝いたします。ですが挨拶だけはされたほうがよろしいかと?」

「(急いだが間に合わなかったという形がいいかな)わかった最後に顔を出そう。…そういうえば他の守護者は参加しないのか?」

「アウラはマーレの手伝いとして参加しますが、一般メイドの慰安旅行に参加する守護者はおられません。シャルティアは『のんびりした一日を約束するであります』といっています。プレアデスのメンバーも不参加と聞いております」

「わかった…取り敢えずスケジュールが決まったら教えてくれ」

「分かりました」



「(スケジュールずれてた? それにしても最悪のタイミングだろこれ!? えーとえーと) :
なんとか間に合ったようだな、約束を果たそう」

アイنزは場に流れていた微妙な空気を自分が原因——ある意味その通りなのだが——と考え何とかするべく建前の計画通りインクリメントをお姫様抱っこで抱き上げる。インクリメントは望外の喜びに魂が抜け声も出ず、他のメイドだけにとどまらずアウラにまで嫉妬の輪が広がる。

「マールレ」

「あっはい…」

「受け取れ」

「わっわかりました」

アイنزズは優しくインクリメントをマールレに委ねる。マールレは思考の檻から飛び出しアイنزズの命に従う。

「私が本当に守りたいのはナザリックではなくお前(NPC)たちだ、アウラ、マールレ皆を守れることは私の想いを守ることと知っておいて欲しい」

マールレ、アウラに視線をうごかし全体を見渡す

「どんな場所であつても汚れた場所に誇りも威厳もない。ナザリックはお前たちの献身

により荘厳さを維持しているのだ。私はその仕事に満足している…今日は私の感謝を受け取ってもらえ嬉しく思う…マーレ」

「はっはい」

「私は食事を不要とするためディナーは付き合えないが最後までよろしく頼む（よ…よし乗り切った）」

「わっわかりましたアインズ様」

アインズはインクリメントを抱きかかえるマーレを見る。マーレは嬉しそうに、インクリメントは魂の抜けた顔で自分を見つめているのに『二人共見るのが俺でいいの?』という感想を抱きつつも逃げるように転移していった。

いまだ体が硬直したようにアインズの消えた場所を見つめているメイドたちに対して、アウラとマーレは平静なままだが魂の抜けたインクリメントをどうして良いかわからずマーレも固まっていた。

「マーレ！インクリメントを抱っこ出来て嬉しいのはわかるけど、そろそろ動いてもらえないかな？」

アウラの声はフリーズしていた皆を現実に戻し笑いの花を咲かせた。

ただ一人マーレだけが思い悩んでいた。

会場の片付けはそんなに時間がかからなかった。

というのも仲間たちが片付けのついでとばかりに掃除を終わらせてくれたからだ。

それは微妙な空気をまとうマールレ達に時間を作るためでもあった。

「インクリメントさん…」

「なに？ マールレ君」

「えと…んと…」

インクリメントはマールレの考えがわかる気がした。インクリメントにはお気楽な姉妹が答えをくれていたから深く悩まずにすんだが、マールレが悩んでいるなら自分が支えようと決める。その決意は彼女の表情を優しくやわらかなものに変えた。

「マールレ君、アインズ様と私を比べた？」

マールレは体をビクツとさせ恐る恐るインクリメントに視線を向ける

「私もそうだった。不敬なのかとも思った。でも違う…アインズ様にご奉仕する喜びは何物にも変えられない。でも…より綺麗に掃除できた時はもつと嬉しい。それは自分の満足感も加わったからだと思う。それは不敬？」

「ち…違うと思います。僕もよりうまくアインズ様のご命令を実行できれば嬉しくなります」

「うん。私はお休みというものを頂いた時試練だと思った。ずっとなんのための試練か

と考えたけど答えは分からなかった、でも今ならわかる」

マーレはインクリメントの言葉を聞いている

「アインズ様から頂いたお休みがあったからマーレ君と今ここにいる…。」

インクリメントは膝をついて目線をマーレにまっすぐに向ける

「私達の感じる幸せはアインズ様のご意思だと思う…：私はアインズ様にご奉仕できることが一番の幸せ。でもマーレ君がいてくれればもつと幸せになれると思う…：アインズ様は本当に素晴らしいお方ね」

マーレの顔から緊張が崩れていく

「マーレ君、友達になろう」

「はっはい…。」

返事をしたマーレの目が潤む、インクリメントはマーレを優しく抱きしめ、マーレもそれを応える。共に心のなかでアインズへの感謝の祈りを唱えていた。

ブループラネットの作り上げた星空はそれを祝福するかのよう流星雨を二人に降り注いだ。

マールとインクリメント エピローグ

インクリメントは今回のアインズ様当番の間に伝えたい事を心に潜め激務をこなしていた。

その中で僅かな仕事の空きを見つけてインクリメントはアインズに声をかける

「アインズ様、お話ししたいことがあるのですが少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

アインズが忙しいのを承知の上で時間を使わせることに抵抗を感じつつも、伝えたい事があった。

「ん？かまわないぞ…聞こう」

インクリメントはアインズの正面に膝をつき頭を下げて話をはじめ

「感謝いたしますアインズ様…私はアインズ様に頂いたお休みに感謝しております。お休み頂けたからこそ私は掛替えのないものを手に入れることができました」

「それは何だ？」

「友達です」

「…そうか」

アインズは自分が無理矢理に作った休日を受け入れられていないことは知っていたが、それでもいつかそれを喜んでもらいたいと思っていた。

今その日が訪れたこと、そしてそれが友達を作ることに役立ったと言われれば、アインズにとって最高の結果が出たと感じさせるに十分だった。

しかも相手が以前友だちがいなかったと言ったマーレだったこともアインズを高揚させる要因となり、緩やかな高揚がアインズを満たし続ける。

「インクリメント…私が望んだ最高の結果に至ってくれたことを嬉しく思う。」

「私こそアインズ様のお導きによつて本当に素晴らしいものを手に入れることが出来ました。この喜びを与えてくださったことに感謝いたします。」

「なるほどな、なんとなくユグドラシルの運営の気持ちがかかった気がするぞ、俺がエクリプスを見つけた時こんな気持ちだったんだろうな…ならば俺もそれに習おう…インクリメントよ私の与えた課題を最初に達成した褒美を与えよう、クリエイトマジックアイテム！」

アインズは自らの経験値をその総量から見ればわずかといえ消費させることによりマジックアイテムをつくり上げる。

「…このアイテム名はボンド・オブ・インクリメント…お前のものだ。」

それは攻撃的な炎のダメージを防ぐことは出来ないが平時の7階層であれば一般メ

イドでも通り抜けることが出来る低位のマジックアイテムで、戦闘職であれば装備箇所を消費するだけのゴミアイテムかもしれないが、インクリメントにとっては最上のマジックアイテムだった。

インクリメントは平伏しそれを受け取った。

ナザリック6階層。転移門のある闘技場を出て見渡すと高さよりも幹が太いずんぐりとした巨木がある。それはこの階層の守護者であるアウラとマーレの家だが、アウラは家よりも外を好みマーレは家にいる時は布団の一部となるため二人が揃わないかぎり静かな場所だったが、今日は活気にあふれていた。

一階のリビングの椅子に座るのは、指輪をはめた手で本をめくるインクリメント。

その指輪は課金クラスであるミニナムと同等の効果がありマーレ達の家に入るためには必要なアイテムだ。

アインズ様当番を終えたインクリメントが勢いで6階層まで歩いて行き、出迎えてくれたマーレから貰ったものだった。その時指輪を受け取ったインクリメントは、微笑み悩むこと無く左手の薬指にはめるのをマーレはニコニコと見つめていた。

それ以来インクリメントはまとまった時間が出来るとマーレの家に遊びに来るようになった。

「い…インクリメントさん、何読んでいるんですか？」

マーレはインクリメントの座る椅子の横に登り笑顔で話しかける

「銀河鉄道の夜。司書さんの話を聞くと内容が少し違うのが幾つかあると言っていたから比べ読みしようと思う。」

「お…面白そうですね」

「マーレ君は？」

「ぼ…僕は星の王子さまです」

「気になる…比べ読み終わったら借りてみようかな」

「は…はい、切ないですけど面白いですよ！」

家のドアが開き暴風のような勢いでアウラが上がってくる。

「あくインクリメント来てたんだ、お昼はどうするの？」

「アウラ様こんにちは。お邪魔しています。お昼はお弁当を持ってきましたから一緒に食べませんか？」

インクリメントは机の上に巨大な弁当箱を置く。普通の人間なら5人は軽く食べられそうな大きさだったが、その大半は種族特性として大食を定められているインクリメント一人に必要な量だった。

「いただきます。所でインクリメント？」

「なんででしょうか？」

「食事の時にさ本の話聞かせてよ、マールレ教えてくれないんだよ」

「お姉ちゃん…自分で読もうよ…」

「いいじゃない！ねえ？インクリメントお願い」

「はい、でもオチは話さないので、気になったら本読んでみてください」

「まっまってよ！それってひどくない？」

「そ…そうだね僕もそうするね」

「あゝゝもう、ご飯食べよご飯！マールレお茶いれて！」

楽しそうな笑い声が重なり、アウラもそれにつられて笑いだした。

ナザリック10階層宝物殿

アルベドがリング・オブ・アインズウールゴウンで転移してきた。

「アルベド、首尾は上々のようですね」

パンドラズ・アクターは大げさな仕草でうやうやしくアルベドを宝物殿に迎え入れる。

しかしその表情は変わること無く何も読み取れない。

「あら？それは嫌味かしら？褒め言葉かしら？」

「おお…分かっていただけだと思いますが…」

いつもどおりの演技がかった声から、トーンが落ちる

「両方ですよアルベド」

「なら良かった」

笑顔で受け止めるアルベドに対し、肩をすくめて見せる

「もし非常事態が起こりインクリメントを諦めねばならなくなった時マーレを脆くするのは？」

「自覚もなく出来る傷のほうが予想がつかないわ。だけど自覚できているなら対処できる、それなら早いほうがいいと思わない？」

「そこに…今回の件でマーレがより強くあろうとする…とでも続きますか？そのためにアインズ様に間違ったスケジュールを伝えた…などとは言いませんよね？」

パンドラズ・アクターの声に危険な色が灯る。

「あら？私がアインズ様に嘘をつくと思われているのかしら？」

「スケジュールが変わったのを伝え忘れただけ…と？」

「急ぎではない案件に混ざっていただけよ」

「同じように聞こえますが…そういうことにおきましよう…」

パンドラズアクターから危険な雰囲気が消える

「初めから予想していたのでしよう？それでもあなたは手を貸してくれたわ」

「建前が完璧で嘘ではなく、本音もアインズ様の損にはならないなら…というだけです」

パンドラズ・アクターはアルベドの狙いがマーレの想いを叶えながらも、違う創造主を持つものが交流を持つことで…仮にぶくぶく茶釜が敵対した際にマーレが敵となりにくいような関係しからみを多く作ることだと理解していたが、その必要はないと考えていた。

ただアインズが多くの者と交流し繋がりを強くすることは有益だと考えてあえて口を出さなかった。

「少し違うわ、本音が2つあるだけよ」

パンドラズアクターは大げさに天を仰ぐ

「…本当に2つだけなんでしょうかね…」

「そうだとして何か問題があるのかしら？」

「いささか考え過ぎだと思いますが？」

「それが統括たる私の役目よパンドラズ・アクター」

「Geh承知htいたしましたklar!

「ところであれだけの服よく用意出来たわね、人数分以上あったと思うけど？」

「シャルティア、アウラ、マーレから借りれましたし、あとは色々頑張らさせていただき

ました」

能力向上を必要としない低位の服で良かったためインズの使わないけど捨てられないアイテムをもらいパンドラズ・アクターが作ったものだった。

「今度私の服も用意してもらおうかしら？」

「おお…レディの衣装を用意できるとは光栄です…機会があればぜひ」

「その時は是非お願いするわ…ダメね本題が最後になってしまったわね…今回はいろいろ動いてくれてありがとう。これからも色々お願いすることがあると思うけどよろしくお願いね」

パンドラズアクターは何も言わずに恭しく頭を下げる

「神の御加護のあらんことを
Got t s e g n e d i c h」

「ありがとう。でも私は常にそれを感じているわ」

アルベドはにこやかな顔で転移した

「出来るなら独り占めしたいと思うのは欲張りかしらね…」

それを見送るパンドラの表情からは何も読み取れない

「アルベド、私はアインズ様の孤独を埋めて差し上げたいのですよ…しかし疲れました…気分転換にコキユートスあたりと気楽に一杯やりたい所ですが…慰労もかねてシャルティアでも誘ってみましょうか」

話 その夜パンドラズ・アクターは違う意味で疲れ果てることになるがそれはまた別のお